



夏季修養会特集号

| 目次 | 頁 |
|---|---|
| ・ 日本基督教団の歴史に学ぶ～教団前史, 教団の成立, そして敗戦～……………魚住英昭 | 1 |
| ・ 戦後の日本社会, 日本人とキリスト教……………神谷一夫 | 6 |
| ・ 中原牧師のブレイクタイム「アニミズムとキリスト教」……………中原眞澄 | 9 |

日本基督教団の歴史に学ぶ

～教団前史, 教団の成立, そして敗戦～

魚住 英昭

- 1 本年度の内丸教会夏季修養会は、『日本基督教団の歴史に学ぶ』という、これまで、ほとんど正面から取り上げる事のなかったテーマで実施することになりました。発題者は、私と神谷さんで、私に課されたのは、「教団成立前後から敗戦までの歩み」ということになります。一方、神谷さんからは、「戦後のキリスト教と日本人」という違った切り口でお話いただくこととなりました。戦争責任告白を起点とした戦後の教団の歩みについては、秋の教会協議会においてあらためて学習のテーマとすることになっています。
- 2 企画段階において、私に与えられた持ち時間が30分ということであったことから、教団成立前史を詳しくレポートすることは無理ではないかとの配慮から、「教団成立前後から」ということになったのですが、実際に準備作業にとりかかってみると、やはり、明治期以降のプロテスタント史を概観することは避けられないのではないかと感じるようになりました。明治期以降における日本のキリスト教がどのような歴史的文脈、あるいは、どのような言説空間の中に置かれてきたのかを認識しておくことは、戦時中の教団のあり方を理解する上で最も重要なことであると考えられたからです。そのため、何冊かのテキストから、今回の修養会のために整理・編集した年表も、結局は、半分以上が教団成立以前の事項となりました。
- 3 明治期、最初にプロテスタント教会の宣教師が来日したのは、まだ、江戸幕府の禁教政策が明治

政府にも継承されていた時代でした。その後、外圧によって宣教が認められた後も、国内には、キリスト教を邪教視する空気が蔓延していました。しかし、当時、日本を訪れた諸教派の宣教師は、かつてアジア等において植民地支配の先兵となった多くの宣教師とは異なる真摯さを持った人々が多く、旧士族や知識階級の青年を中心に豊かな人格的出会いをもたらしました。やがて、これらの青年キリスト者が中心となり、横浜バンド、熊本バンド、札幌バンドという三つの源流が現れ、そこから育ったキリスト者を中心にキリスト教が国内に広く普及することになりました。やがて、植村正久のように非常に高度で緻密な神学を打ち立てるキリスト者も登場し、また、学会や医療、福祉など多くの分野に指導的な人材が多数輩出することになりました。労働運動も農民運動、社会事業、消費者運動も先鞭をつけたのはキリスト者でした。大正デモクラシーにおいてもキリスト者であった吉野作造が旗手となりました。こうして、日本のキリスト者は、宗教人口では少数派ながら地の塩として社会に確実に浸透し、時代をリードしていたのです。

- 4 しかし、それらの時代は、一方で、世界、そして日本に暗雲が立ち込めていた時代でもありました。第一に、当時は、世界史的に見ても国家主権や民族自治という価値が確立しておらず、西欧の列強がアジアやアフリカを植民地として、政治的支配を及ぼし、経済的権益を握ることが当然視（強国からは）されていた時代でした。たまたま

歴史的な偶然や強運から植民地化を免れた日本は、そうした状況を奇貨として、富国強兵政策を推進し、西欧列強の仲間入りしようと全力を尽くすこととなります。いわゆる脱亜入欧です。

日本は、日清戦争、日露戦争の勝利を機に、朝鮮や中国北東部に巨大な権益を得ることとなります。やがて、こうした動きは、朝鮮併合、傀儡国家・満州国の建設へとつながっていきます。日清、日露の戦争勝利は、急速に国民の一体感、昂揚感を高め、天皇を中心とした国家への揺るぎない信頼を醸成していくこととなります。その時々、政権の外交政策や経済政策が痛烈に批判されることはあっても、「国体」は、大部分の日本国民にとって冒してはならない自明の価値となるわけです。

一方、法制度の面では、大日本帝国憲法が国民の上に重くのしかかっていました。この憲法は、近代憲法の体裁をとりつつも、基本的人権や思想信条の自由などがすべてカッコつきのものでした。すなわち、国体に抵触しない範囲で、それらを認めるというもので、現在の日本国憲法のように絶対無条件のものではなかったのです。さらに、国民の行動規範として古くから教育勅語があり、それへの違背を監視する法律として治安警察法（後の治安維持法）がありました。こうして、国民の行動規範は外側から枠を与えられ、天皇制国家への批判を封じる言説空間ができてきたのです。

5 それでは、こうした歴史的状況は、日本のキリスト者、特に指導層にどのような影響を与えていたのでしょうか。もちろん、個々のキリスト教指導者によって、政治・社会的視点は千差万別でしたが、概していえば、天皇を中心とする国家への基本的信頼が厚い点においては共通していたと考えてよいと思います。当時のキリスト教指導者たちは、アジアの中で最初に脱亜入欧を果たした日本こそがアジアの盟主となって、横暴な西欧列強からアジアを解放することができるに違いないという信頼感をいだいていました。そして、その過程においてキリスト教は、軍隊と異なるアプローチによって、質の高い解放を可能にできるはずであるとも考えていたのです。したがって、朝鮮や台湾、満州等の植民地や権益に対してもあまり疑問を差し挟むことはありませんでした。たとえば、海老名弾正は、当時の日本国家を選民としてのユダヤ民族と重ね合わせ、やがて神の召命によってアジアを解放に導くべき存在として位置

付けていました。また、植村正久も朝鮮が未だ自立できる政治的文化的状況には至っておらず、日本が親権者として適切な役割を果たすべきであると考えていました。もちろん、当時は、現在のよう国民に多様な情報が提供される時代ではなく、新聞報道等にもすべてバイアスがかかっておりました。そうした意味で、現在の基準によってのみ、先人たちの誤謬を非難することはフェアとは言えません。ただ、その時代にあっても、人づてに植民地における軍の暴虐等の情報は入ってきていたものと推測されます。しかし、それらの限られた情報を批判的に分析できなかったのは、前に述べた国家への基本的信頼が想像力をくもらせていたためと思われます。やがて、日本は、日中戦争、太平洋戦争の時代へと突入し、ファシズム体制の中で、「日本的キリスト教」が標榜されるようになるのですが、その萌芽は、既に前史の中に、しかも日本のキリスト教の礎石として後世にもっとも大きな影響を与えた指導者たちの中にもあったと言わざるを得ません。

6 さて、大正デモクラシーの熱気の陰で、一時、雌伏していたかに見えた国粹主義や軍国主義は、大正後期頃から再び表舞台に登場してきます。ロシア革命を契機とした共産主義運動の高まりや膨張路線を契機とした日本の国際的孤立などが背景にあることは言うまでもありません。国内では、治安警察法、特高警察の組織化、テロリズムの横行等を通じて言論や思想信条の自由が圧殺されるようになりました。物言えぬ時代に突入してきたのです。こうした時期に、政府は、様々な事業団体や宗教団体を一定の枠内に押し込めてコントロール下に置こうとするようになりました。すなわち、一定の保護を与える代わりに、確実に国体護持に忠誠を誓わせ、大東亜共栄圏建設等の国策に協力的な姿勢をとらせようとしたのです。既に、その原型は、明治末期において、仏教、神道、キリスト教を臣民育成に向けて協力させようとした「三教合同」にも示されていました。こうした歴史的文脈の中で、1940年10月17日、キリスト教諸教派の多くは、青山学院校庭に2万人以上の信徒を参集させ、「皇紀2600年奉祝全国基督教信徒大会」を開催し、そこで諸教会の合同を決議しました。

その決議を受けて、1941年6月には、正式に日本基督教団が成立し、教派ごとに分けられた11部門からなる組織として発足しました。実に、太平洋戦争に突入する2箇月前のことでした。この

合同について、国家権力による有形無形の強制があったことは論を待ちません。事実、これに加わることなく独自に行動した教派・教会は、何やら得体の知れない不穏な団体として特別な監視や牽制の対象になったのです。一方、教団に加わった教派・教会も決して国家権力の監視や干渉から自由だったわけではありません。むしろ、教団に加盟した教会には、国家権力が規範としていることを先取りして率先垂範して見せることが求められました。すなわち、よい子（優等生）であり続けなければならないという宿命を背負わされることになったのです。これには、さすがに抵抗を覚え、気が進まなかった教会や信徒も少なくなかったことと想像します。国家の指令によりやむを得ず合同したと言われる所以です。

しかし、教団としての合同を待つまでもなく、既に国家の規範を先取りし、これに宣教の業を積極的に適合させて行こうとする指導者も少なくありませんでした。彼らは、大東亜共栄圏の理想を積極的に支持し、これにキリスト教の宣教をプラスすることで、大東亜共栄圏の質実が一層充実するものになるはずであるとの信念を抱いていました。すなわち、忠君愛国や滅私奉公を重んずる日本のキリスト教こそが、欧米のキリスト教以上に、神の求める本来的な使命を遂行し得る立場にあるというのです。こうして、彼らは積極的に「日本的キリスト教」を推進していきました。神社参拝についても、偶像崇拜とは受け止めず、天皇や国家、国土を敬う美しい日本の習俗として積極的に評価しました。教団成立と同時に統理となる富田満は、教団成立以前の1938年、日基大会議長として特高警察とともに朝鮮を訪れ、同地の諸教会に対し、積極的に神社参拝を行うよう説得にあたりました。ここには、邪心は一切なく、日本のプロテスタント教会の指導的立場にある者の一人として真摯に宣教に取り組んでいこうとする責任感がありました。

日本のキリスト教諸教派にとって、日本の膨張政策、満州、中国、朝鮮、東南アジア等の実質的な支配や植民地化は、宣教にとって絶好の機会でもありました。宗教的な陶冶によって現地住民の懐柔を図ることは、国策にもかなっており、軍や政府と諸教会は、一体となって、他国住民の中に入り込んでいったのです。もちろん、中には、強圧的な植民地経営や現地住民への暴虐な対応に強く抵抗感を覚え、真摯に現地住民に奉仕した「良心的」な伝道者も存在しました。しかし、彼

らもまた、国家の膨張政策、植民地拡大といった大状況に対しては、批判的な精神を持ち合わせませんでした。こうして、日本の諸教派、教団は、満州や北支、南方に多数の宣教者を派遣し、全くの善意、熱意からキリストを宣べ伝えようとしたのです。

7 少々、話題が逸れてしまいましたが、日本基督教団は、発足と共に綱領を発表します。その内容については、資料を用意しておきましたが、国家総動員態勢や大東亜共栄圏の理想に宣教目標を適合させるもので、既に富田統理らが追求してきた路線でした。これによって、合同にかかわった諸教派は、完璧に戦時態勢の中に組み込まれることとなりました。国内では、積極的に宮城遙拝や神社参拝を実施したほか、戦闘や皇軍兵士のために祈りを捧げ、金属類の供出等を通じて銃後の民として協力することも惜しみませんでした。

8 戦時中の教団の在り方に関して、特筆しておくべきことがあります。1942年から1943年にかけて起こったホーリネス弾圧事件です。当時のホーリネス系教派は、教団の第6部、及び9部に属していましたが、セブンスデイ・アドベンティスト系などと同様、教団内では、ファンダメンタルな信仰を有する教派として一段低く見られる傾向にありました。彼らは、天皇とキリストのいずれが優位であるかという特高警察からの踏み絵のような質問に対し、毅然とキリストの優位を主張したり、再臨信仰に基づいて現在の国家権力を相対視するような言動をとったりしました。そのため、第一次検挙、第二次検挙で計134人もの教職者が一斉に検挙され、多数の獄死者が出ました。こうした事態に対し、個別的には支援を行った教会や信徒もありましたが、教団当局は、むしろ歓迎のメッセージを發しました。もともと、浄化の対象にしたいと思っていたファンダメンタルなグループに対し、政府が先に手を打ってくれ、これによって教団の統一性が一層推進されたというのです。知的な神学大系を重視する教派は、しばしばファンダメンタルな教派を蔑視しがちですが、压制下にあつて偶像崇拜を拒んだり、信仰規範を固守したりしようとしたのは、むしろ、良心的兵役拒否を貫いた灯台社（エホバの証人）のようにファンダメンタルなグループであったことに留意しておく必要があります。

9 1945年8月15日には、終戦を迎えますが、教団の富田統理は、玉音放送を聴いた後に一同に向かつて、国体護持のために邁進することがキリス

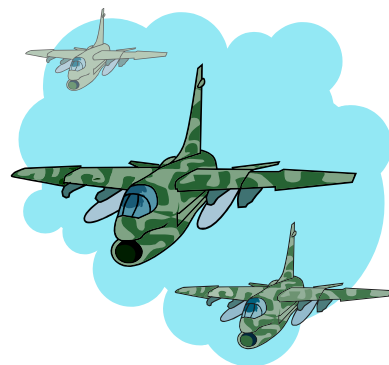
ト者の務めであることを訴えました。日本において指導的な地位にあった人々の多くがとった行動であったことと思われまます。しかし、やがて戦時中における歴史の客観的実相が徐々に明らかとなっていく中でも、キリスト教指導層がそれに対し、鋭敏に反応した形跡はうかがわれません。後世からみると、教団による戦時体制協力の実態は、信徒のみならず、国民を欺瞞する罪深い行動であったと言わざるを得ません。しかし、戦後、日本を占領地として統治下においたGHQも諸教会が合同した教団をその後の占領政策に活用していきるとの胸算用から戦争責任を追及することはありませんでした。戦時中、大日本帝国の元首であった天皇の戦争責任を占領政策遂行のための利用価値から不問に付したことと同様のことが教団の指導者たちについても生じたのです。富田統理をはじめとする教会指導層は、結局、戦後もミッション系大学の理事やNCCなど、キリスト教運動の主要な地位につき活躍し続けることとなったのです。こうして、教団は、自覚的な戦争責任を戦後の再構築に反映させることのできなかつた日本国家の縮図のようなありようで、戦後のスタートを切ることとなったのです。

10 私が担当する日本基督教団史の前半部分レポートは、ここまです。今回、あらためて、日本プロテスタント史や日本基督教団資料集を拾い読みしてみても感じたことは、人間の歴史というものは常に罪の歴史であるということでした。日本の歴史教育は、しばしば英雄史観に彩られがちであると言われ、プロテスタント史の中にも尊敬すべき先人が多数登場しまます。しかし、それらの先人達がどんなにすぐれた知的体系や信仰的信念、人徳を持ち合わせていようと、常に正しくあることは不可能でした。あるときは、歴史に残る優れた業績を残しても、あるときは、大状況について正確な情報を欠いていたがゆえに誤った判断をしたり、あるときは、熱烈な信仰的实践をしていても転向を余儀なくされたりということは枚挙にいとまがありません。それとは逆に、典型的な悪玉も存在し得ません。富田満統理については、結果的に否定的な部分のみを紹介することになってしまいましたが、統理にまでなつた背景には、信仰に基づいた種々の実績や多くのキリスト者の支持があつたはずです。また、その時々々の行動も統理として教団の組織とキリスト教を守り続けようという強い信念があつたからと思われまます。実際、関係者の証言によると、富田統理は、

信仰の根幹をも揺るがしかねない文部省の横暴な介入に堪忍袋の緒を切らし、大変な剣幕で詰め寄つたというエピソードも紹介されています。その苦悩は、今の私たちからは計り知れないものであつたかもしれません。あの閉塞的な時代、そうした限界状況に置かれたとすれば、大部分の人が同じような行動や判断を示したかもしれません。そのように考えると、私たちは、過去の歴史を評価するときに、後世の安住の地点に立って、先人の不明や過ちを糾弾するような態度をとることは厳に慎むべきかと考えまます。戦後、日本基督教団が不毛な対立を繰り返してきた背景には、戦争責任に目をつぶる人々がいた一方で、戦争責任を重視する陣営にも当時、流布していた手法である「糾弾」に依拠してきた人々が多数存在したことがあつたように思われまます。私たちキリスト者、そして教会には、過去の過ちから目を遠ざけたり口を閉ざしたりしないと同時に、高みから他者や先人を糾弾しない態度が求められています。共に罪を犯す存在、罪を犯してきたであろう存在として、過去の歴史を振り返り、そこから客観的な事実や施策・判断の過ちについての気づきを得て、現在の歩みに反映させていくことこそが大切なのではないのでしょうか。

参考文献

- 1 新教セミナーブック 2『日本プロテスタント・キリスト教史』 土肥昭夫 (1980 新教出版社)
- 2『国家を超えられなかつた教会』15 年戦争下の日本プロテスタント教会
原 誠 (2005 日本キリスト教団出版局)
- 3『日本プロテスタント教会史』(上下巻)
小野静雄 (1986 聖恵授産所出版部)
- 4 史料による『日本キリスト教史』
鵜沼裕子 (1992 聖学院大学出版部)
- 5 日本基督教団史資料集第 2 篇『戦時下の日本基督教団』 日本基督教団宣教研究所教団資料編纂室 (1998)



日本基督教団の歴史に学ぶ

2012年8月26日

内丸教会修養会

作成: 魚住英昭

| 西暦 | 元号 | 日本史上の政変等 | プロテスタント教会, 日本基督教団の動向 | その他キリスト教界の特記事項 | 世界の出来事 |
|------|------|--------------------------------|---|---|----------------------|
| 1858 | 安政5 | 日米修好通商条約 | | 1859 居留地内に諸教派の宣教師が来日 (J.C.ヘボンら) | 1840~1842 清国、アヘン戦争 |
| 1867 | 慶応3 | 大政奉還 | | 1867浦上四番崩れ | |
| 1868 | 明治元 | 王政復古 | | 1873キリシタン禁制が廃止 | |
| | | | 1872日本基督公会設立 (横浜バンド) S.R.ブラウン、J. H. パラ →押川方義、のちに植村正久など | | 1877インド帝国 (ヴィクトリア女王) |
| | | | 1876熊本バンドの成立 L.L.ジェーンズ→海老名弾正等 →のちの日本組合基督教会の指導者排出 | | |
| | | | 1877札幌バンドの成立 W.S.クラーク→新渡戸稲造、内村鑑三ら →のちの無教会へ | 1877東京一致神学校 | |
| | | | 1877日本基督一致教会設立 (改革・長老派) (1890日本基督教会に改称) | | |
| | | 1880代…欧化主義政策 「脱亜入欧」 | 1886日本組合教会設立 (会衆派中心) | 1884植村正久『真理一斑』 | |
| | | | 上記以外に、諸教派が伝道開始 (聖公会系列、南北バプティスト、メソジスト、ルーテル、救世軍、セブンスデイ等) | 1880代~1890代 基督教社会事業 留岡幸助、石井十次、小橋兄弟等 | |
| 1889 | 明治22 | 大日本帝国憲法発布 | | | |
| 1890 | 明治23 | 1890 教育勅語発布 1890代 国粹主義台頭 | | 1891内村鑑三、不敬事件 | |
| 1894 | 明治27 | 日清戦争 (~1895) →遼東半島、台湾の権益 | 1896 日本基督教会、台湾伝道を開始 | | |
| 1900 | 明治33 | 治安警察法公布 | 1901植村正久、海老名弾正福音主義論争 | | |
| | | | 1902~日基、特別伝道を開始 台湾、朝鮮、満州 | ※廃娼運動、救らい事業、等 | |
| | | | | ※キリスト教関係者の主導で労働運動が興隆 (キリスト教社会主義) →片山潜、安部磯雄、木下尚江ら | |
| 1904 | 明治37 | 日露戦争 (~1905) →朝鮮半島、満州の権益 | ※内村、安部、木下らは、幸徳らと共に非戦論 柏木義円も非戦論を展開 植村は、人類進歩の契機として評価 | 1904東京神学舎設立 (植村) | |
| | | | 1904 日本基督教会、朝鮮伝道に着手 | | |
| | | | ※海老名弾正、植村正久等の植民地観 1911組合教会による朝鮮伝道の拡大 | 1909賀川豊彦、路傍伝道開始 | |
| | | | | 1919賀川豊彦による社会的実践 労働運動、農民運動、消費者運動 | |
| 1910 | 明治43 | 大逆事件 朝鮮併合 | | | |
| 1912 | 明治45 | 政府「三教合同」を斡旋 ※三教 (仏教、神道、基督教) | ※内村鑑三は反対、植村正久は批判的 | | |
| 1913 | 大正2 | 1910代~1920代 大正デモクラシーの時代 | 海老名…キリスト教デモクラシーを推奨 植村…キリスト教価値とデモクラシー原理を区別 | ※吉野作造…民本主義 | |
| 1914 | 大正3 | 第一次世界大戦 (~1919) 1915対華21条要求 | | | 1914 第一次世界大戦 |
| 1919 | 大正8 | 朝鮮 三・一独立運動 | 朝鮮のキリスト者や教会の犠牲 (ソウル南方の教会にクリスチャン男性30人が閉じ込められ焼き殺される。) 植村は、武断政治を批判、内村は同情のみ | | 1917 ロシア革命 |
| 1925 | 大正14 | 治安維持法公布 | | | |
| 1928 | 昭和3 | 全府県に特別高等課設置 | | | 1929世界大恐慌 |
| 1931 | 昭和6 | 満州事変 | | | |
| 1932 | 昭和7 | 満州国建国宣言 | | | |
| 1933 | 昭和8 | 日本…国際連盟を脱退 | 1933 満州伝道会 | | |
| 1936 | 昭和11 | 二・二六事件 | | | |
| 1937 | 昭和12 | 盧溝橋事件、日中戦争 南京事件 | 1937 東亜伝道会 | 1937 矢内原忠雄、拳国一致政策やナチスのユダヤ政策、キリスト教界を批判し、東大を辞す。 | |

| | | | | | |
|------|------|------------------------|---|-------------------------------|--|
| 1938 | 昭和13 | 国家総動員法 | | | |
| | | | 1938.9 日基大会議長・富田満、特高警察と共に朝鮮の教会代表者に神社参拝を説得。朝鮮の長老派総会で神社参拝が国民儀礼であり、信仰に反しないと決議させる。 | | |
| 1939 | 昭和14 | 第2次世界大戦 1939.4宗教団体法 | 1939 朝鮮では、多数のキリスト者が神社参拝を拒否し、投獄、獄死、教会閉鎖が相次ぐ | 1939.6灯台社事件 (明石順三ら良心的兵役拒否) | |
| 1940 | 昭和15 | 日独伊三国同盟 | 1940. 10. 17 皇紀2600年奉祝全国基督教信徒大会→諸教派の合同を決議 | | |
| 1940 | | 大政翼賛会 | | 1940 満州基督教開拓村(入植) …賀川豊彦提案 | |
| 1941 | 昭和16 | 中国で三光作戦、細菌作戦 | 1941.6 日本基督教団創立総会 君が代斉唱、宮城遙拝、皇軍兵士への黙祷、皇国臣民の誓 「われら基督教信者であると同時に日本臣民であり、皇国に忠誠を尽くすをもって第一とす。」 | | |
| 1941 | | 真珠湾攻撃、太平洋戦争 | | 1941 井上伊之助、台湾で先住民に医療伝道 | |
| | | | 1942.1 富田満総理が伊勢神宮に参拝し、天照大神に教団の成立を報告。 | | |
| | | | 1942.6 ホーリネス弾圧事件。教職者122人検挙。教団幹部は、当局の措置を歓迎、辞職を勧告。 | | |
| | | | 1942.11 富田満総理、天皇に拝謁し、大東亜共栄圏建設のため報国を誓う | | |
| | | | 1943.11 教団総会で軍用機4機の献納を決議 『飛べ、日本基督教団号』 | | |
| | | | 1944. 「日本基督教団より、大東亜共栄圏にある基督教徒に送る書翰」を送り、大東亜戦争の意義訴え | | |
| | | | 1944 沖縄が空襲で壊滅状況。大部分の教職者が沖縄から脱出。 | | |
| | | | 1944.11 『日本基督教団信仰問答』を作成(信条委) | | |
| 1945 | 昭和20 | 敗戦 | 富田満総理、全国牧師、主任者に指令を通達 「聖旨を奉戴し、国体護持の一念に徹し、…皇国再建の活路を拓くべし。」 | | |
| | | | GHQの占領政策のため、戦争責任追及を免れる。 | | |

戦後の日本社会，日本人とキリスト教

神谷 一夫

はじめに

今回与えられた課題は、「教団」の戦後の歴史を戦責告白までたどることにあつたが、その前に、日本人の思想（考え方）や行動様式が、敗戦という時間の一つの区切りにおいてガラリと変わりうるものかという疑問をベースに、日本人と日本人が形成している社会の特質に視点を当てながら、キリスト教、教会、教団の問題に迫ってみたい。

1 戦後日本の社会制度の変革

昭和 20 年の敗戦後、日本社会には、大きな社会制度の変革が起こった。この変革が、日本人により自主的、主体的に行われたものであったか、あるいはアメリカを中心とした占領国により外部からもたらされたものかは、議論を呼ぶところであるが、制度変革は確実に行われていった。

変革の主なものは、国家体制の変革、すな

わち、天皇制から、主権在民と言われていた、国民が主体となって国を治めていくという体制への変革である。制度的には、明治憲法が廃止され、新憲法が制定された。それに伴い、新しい経済制度、教育制度等々もたらされていった。これらの変革は、基本的あるいは形式的には、国民主体の民主主義体制のもとで行われた。

日本社会に起こったこの急激な制度の変革は、敗戦という、大きな社会的変革の中で日本人一人ひとりが急激な意識改革に基づいて、新しい制度を考え、新しいこれからの日本を担っていくという意識のもとで行ったのか。また、一人ひとりの日本人の行動、考え方にも大きな変化を与えたのであろうか。特に、ここでは、日本人の生活の基本にある家族の在り方、あるいは地域社会の在り方自体にも変化が見られたのかという点から考えてみる。特にキリスト教という、日本人にとっては一般的にはなじみの少ない考え方や、日本人の家族生活や、地域社会の中でのキリスト教の在り方との関連という視点から考えてみたい。考えのベースには、隅谷三喜男氏の考え方をおいている。

2 敗戦後の日本社会と家族

日本人の生活にとって、敗戦後の社会での大きな変革は、家族制度の変革であった。隅谷氏も「日本社会とキリスト教」において、敗戦前の社会が家父長制家族制度に基づいており、一家においては家長の権限が絶対視され、家族員の行動が家長の意思決定により左右されていたことに触れている。しかし、その一方で、明治以降の産業の近代化は、労働者人口の増加と都市への集中、労働者世帯の増加、そして、その労働者家族の核家族化をもたらし、都市家族、特に労働者家族における家父長の権限は弱まっていったと考えられる。たしかに、戦後の社会においても、家族制度が変わり、結婚は制度的には親の承諾を得なくてもできるようになり、個人の存在が強調され、個人を中心とする生活体系が組み立てられていった。

隅谷氏によると、明治維新以降、キリスト教が日本社会に入ってきた際、問題となったのは、キリスト教が日本社会の基盤であった家族制度と相いれない関係にあったことであるという。この傾向は、当然、敗戦前の日本

社会においてであり、敗戦後の社会制度の変化、また、都市への人口移動、核家族化等により、状況としては、キリスト教宣教にとってよい機会であった。実際にも、戦後の一時期には、若者が教会に集まり、学生のキリスト教、学生 YMCA などの活動が活発化してきた。信者の数も増加してきている。しかし、このキリスト教ブームの期間は短く、昭和 30 年代の経済成長の波の中で停滞していった。戦前のキリスト教と家族の関係が相いれない対立関係にあったのであれば、その条件がなくなった敗戦後において、個人の尊厳が強調される社会状況になれば、キリスト教信者の数は増えるということになる。家族制度が変わり、個人の自由が強調されてきた敗戦後の日本社会において、ブームにはなったが、信者の増加に結びつかなかった原因はいったいどこにあるのか。

3 キリスト教信者の特質

隅谷三喜男氏は、日本キリスト教会の信者の特質として、青年知識層の信仰と生活様式の問題を挙げている。特に明治の初期において、キリスト教に接近したものには旧士族（徳川時代の知識層）が多かったことが指摘されている。青年知識層は、英語教師をも兼ねていた宣教師と知り合い、受洗し、熱心な信者として教会の中核を形成していったことが記されている。この傾向は敗戦後の日本社会にも見られ、戦前の教育に染まっていた若者が、教会に、心のよりどころを求めて集まってきたとされている。このように、若い時代にキリスト教に入信した青年層が、明治期以降に関しては、産業化、近代化の過程の中で、また戦後の日本社会においても、戦後の経済成長、人口の都市への集中、核家族化の波の中に組み込まれていき、日常生活は、伝統的な社会関係、社会生活、日曜日には教会での信仰生活という、二重の生活、あるいは、隅谷氏のいう二階建ての信仰生活が行われていたということになる。このように教会の中核となっていた人々が知識層であったということは、一方では、日本人の大半を占めていた農民層、産業の進展にともなって生じてきた労働者層、サラリーマン層の人々に対するキリスト教の宣教活動はどのようであったのかという疑問にもつながる。その点については次の節で考えることとして、ここ

では取り上げないが、知識層を中核とした教会形成が、教会のありかた、宣教の在り方と関係し、重要な点ではないかと考える。

4 地域社会とキリスト教

隅谷氏は、教会信徒の分布が大都市中心である点を述べている。明治の初期においては、外国人宣教師の活動によって、農村地帯にも教会の設立がなされていたことが記されている。しかし、明治政府の確立、旧憲法の制定、教育勅語の発布、家父長制家族制度の確立、産業の近代化に伴って、教会の大都市への集中が生じていることを指摘している。

隅谷氏は、農村地域、あるいは地方の小都市においてキリスト教の伝道が進捗しなかった原因として家族制度と部落共同体の規制をあげている。この規制は、敗戦前から、敗戦後においても生じていたことが報告されている。家族共同体の規制、あるいは、部落共同体の規制は、そこに住み生活している人々の日常の行動を規制し、その規制を破ることは、家族、部落社会の平和を破るものとして、排除された。いわゆる、家であれば、勘当、村社会でいえば、ムラ八分である。しかし、この共同体的規制といわれるものが機能していた時期は、敗戦後の社会において長くは続かなかった。それは、日本社会における経済成長の動きによるものである。

経済成長に伴い、急速に労働者が求められ、労働者として、地方、農村地域から、過剰労働力と言われた農家の二三男、あるいは、義務教育をおえた中卒の労働力が昭和30年代から大都市へと移動し始め、農村からは、若者の人口が減少し、都市には、労働者人口が増加していく傾向が生じてきた。このような人口の移動は、都市においては、家族の核家族化をもたらし、農村地域、あるいは小都市においては、若者の労働力の減少、家父長家族制度の弱体化、家父長の権威の消滅、共同体規制の無意味化あるいは弱体化が進み、従来の社会的な規制が弱まり、これまた教会宣教にとって状況は好転したはずである。キリスト教宣教にとって足枷となっていたと考えられる、家族制度、部落共同体という二つの存在が社会的に消滅したと考えられるならば、宣教活動は、敗戦後、より活発化し、信者数も増加してきているはずである。ところが、キリスト教徒が日本人口の1パーセントとい

う数字は、基本的には大きな変化が見られない。そればかりか、信者の高齢化という現象を見れば、これから急速に信者数は減少していく方向にある。

5 日本人の人生観、宗教観

では、日本のさまざまな制度が宣教の障害とは言えなくなった近年において、なぜ、日本において、キリスト教が広まらないのか。隅谷氏は、これまでさまざまにあげられてきた日本の社会制度に焦点をあてていたが、さらに、日本人の持つ人生観、世界観、思想に焦点を向けていった。日本の社会においては、キリスト教は知識としては日本の社会に受け入れられていったが、日本人の生活の中に浸透していかなかったのではないかということである。

それでは、日本人が一般的に持っている人生観とは何か。これは人それぞれと言ってもしまえば埒もないが、大まかに言えることは何か。隅谷氏は日本人の人生観（生活観）に横たわっているものは「現世主義」「幸福主義」「体制順応」にあると述べている。「現世主義」は、現世において幸福を得ることに喜びを見出している国民であるという点である。子供が生まれると神社に子供の幸福を祈願し、結婚のときには、神主さんに依頼し、死ぬとお寺に頼む。この生活パターンは日本人にしみこんでいる。

日本人の日常生活を形成してきているもう一つのキーワードは、「幸福主義」である。特に日本人の場合、幸福は物的幸福に焦点が向けられる傾向にある。神社で、お参りするときの祈りの第一は「家内安全」であり、続いて「商売繁盛」という幸福祈願に集中する。それを隅谷氏は「幸福思想」と名付け、日本人の日常生活を規定している特徴ととらえている。

最後に日本人の特徴をなすキーワードは「体制順応」である。「体制順応」という行為は、周りの人たちの考え、行動がどちらに向かっているかをとらえて行動することである。いわゆる、風を読むとか、空気を読むとかといわれていることである。このことは、周囲の行動、考え方に合わせて行動するほうが、自分にとっても、また周囲にとっても良いことだという行動パターンが、日本人の体質の特徴ということである。そのため、「体制順応」

は、戦争中は一億玉砕、敗戦後は一億総懺悔、戦争中の戦争支持から戦後は民主化へと急展開する。つまり、個々人が、それぞれ自分の良心に問いかけ、自分たちの行ったことは、罪であったという神の前での悔い改めを行うことなく、次々に新しい価値観をうけ入れ、それを周囲の人々が支持している雰囲気を読み取り、自分も支持するという行動を起こしてしまう。

このような日本人の行動パターンは、キリスト教信者においても同じであり、教会の働きも、同じ日本人によって支えられているのであるから、日本人的な問題を持っている。つまり、隅谷氏は、日本人の思想体系の根本に問題があると指摘している。行動様式の根本である思想体系において、今までの体系のどこに誤りがあり、新しい考え方において何が大切かを個々人が、考え、悩み、新しい考え方を受け入れていくという過程を通過することなく、周囲に判断をゆだねてしまうという日本人社会の在り方に対して危惧している。

6 まとめにかえて

それでは、日本社会、日本人の以上のような特徴とキリスト教とがどのようにつながり、宣教において、なにが問題なのか、以上の隅谷氏の考え方に基づいて考えてみる。

日本社会における制度の問題は、宣教との関連でみると、まったく関連がないとは言えないが、制度が変わっていくことによって、障害は取り除かれていっているように思われる。日本社会で、キリスト教の宣教が進展しない原因は、制度でなければ、日本人の行動パターン、あるいは思考パターンに関連がありそうである。隅谷氏のいう、現世主義、幸福感、体制順応などの思想パターン、それと、行動に対する結果に関して悔い改めを行わな

い、総懺悔という共同責任に回避してしまうという日本人の行動特質がキリスト教の真理と乖離しているのかもしれない。このあたりは、今のところ関連がよくわからないので、今後の課題であるが、現在の社会状況は、家族、地域社会、職場など今まで強いつながりがあると考えられていたものが、頼れなくなってきている。一方では、個人の尊重、個性の重要性、自己責任など、個人を中心とした、行動様式の拡大、あるいは、権利の主張がなされてきている。キリスト教が、個を大切にす宗教であるならば、日本におけるこの傾向は、宣教活動と結びつくことができるのではないかと考える。

自分の生き方を振り返り、周りの行動、考えにたよらず、自分の考えで、自分の決断で自分の罪を自覚し、罪を悔い改めて行くことによって、新しい自分、新しいつながり、新しい社会の形成の可能性がみられるのではないかと考える。なお、アメリカの文化人類学者のルース・ベネディクトが「菊と刀」の中で指摘している、日本人の文化の特質は「恥の文化」にあるということをもふまえて、「恥の文化」「罪の文化」という視点から、日本人の特徴とキリスト教との関連について、改めて考えてみたい。

参考文献 隅谷三喜男氏の著作

「日本社会とキリスト教」東京大学出版会
1954. 6

「日本の信徒の『神学』」日本キリスト教団出版局 2004. 6

「日本は何をしたか、しなかったか」、日本基督教団出版局 1996. 8

— 中原牧師のフレイクタイム —

「アニミズムとキリスト教」



牧師 中原 眞澄

日本の宗教的慣習や伝統行事の多くは、前面に仏教や神道の装いがあるものの、背後には太陽や月をはじめ、山や海、樹木（特の巨木）や巨石等、自然

への崇拝の思いが籠められているものが数多くあります。これまでの伝統的理解では、こうした自然崇拝はアニミズム（精霊信仰）とも呼ばれ、古く遅

れた宗教の在り方と言われてきました。それでも私たち日本人の多くは、遙かに聳え立つ山を仰ぎ、鬱蒼と茂って屹り立つ巨木を見ると、自ずとその前に立ちすくみ崇高さに打たれるのを、今も常としてしているのではないのでしょうか。遙かな時を耐え静かに佇む姿は、声高に言葉を発しながら時間を疾走する私たち人間の卑小さを無言のうちに覚えさせる…そんな静かな力をもって私たちに迫ります。それは、巨きな存在だけが持つ力ではなく、例えば雪の消え始めた道端に春の訪れを告げるオオイヌノフグリオオイヌノフグリの小さく鮮やかな青色に、あるいは白鳥の去った川端で囀りを交わしつつ飛び交うツバメの黒く鋭敏な飛翔に、私たちは巡り行き・巡り来るいのちの力がこの世界に満ち溢れているのに気づかされます。小さな一葉、小さな一匹・一羽の無心な営みは、人間の卑小な勘定や謀（はかりごと）を一瞬にして無化させる力を、俄（にわか）に私たちの前に差し出すのです。

こうした力の実感、アニミズム（精霊信仰）といった括りで捨て去るには余りに豊かなものと、私たちは本能的に感じてきたのではないのでしょうか。否、むしろアニミズムと呼ばれる心性の内に、私たちが忘れてしまっている大切なものがあるように思えてなりません。それを、小難しい哲学・神学用語で言えば「内在する神」への感覚・感動と言えるでしょう。

キリスト教は伝統的に「超越神」を信仰対象としてきました。神に創造された私たちにとって、創造

者である神は、理解と想像を越えた存在であり、徹底的に私たち人間存在の〈外〉にある神だ…と。こうした「超越神」信仰は、ヒトを神とし、ヒトが人間を支配することを良しとする〈偶像崇拜〉を排除するには大切で不可欠な理解であり、信仰の在り方でした。けれども同時に聖書の神は「内にいます神」「内在する神」でもある…この契機を忘れてしまうと、私たちの信仰は、律法的〈裁き〉の神への恐れのみが行動の基準となる結果、日々の潤いと喜びを失い、かえって己を義とし、他者を裁く独善的なものへと変質してしまうのではないのでしょうか。

コヘレトの手紙にはこういう言葉があります「人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。…『すべては塵から成った。すべては塵に返る』人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう」(3:19~21)。ローマの信徒への手紙でパウロは有名な以下の言葉を書き記しました「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、私たちは知っています」(8:22)。全ての被造物の内にも宿っておられる神の息吹を感じる…それをアニミズムと言うのであれば、キリスト教はもともとアニミズムであっていい…そこにこそ、この現代にあって私たちが、この世を神と共に歩むための鍵がある…そう私は感じ、考えるのです。

あとがき

この夏は、例年にない猛暑に見舞われましたが、9月も下旬に入って、ようやく秋らしい空が見えるようになりました。今回の「うちまる」は、これまでとはやや趣を変え、夏季修養会特集号としてお届けすることとなりました。内丸教会では、当初、夏季修養会の企画に当たって、一気に教団の現代史まで踏み込もうと目論んでいたのですが、さすがにテーマが壮大すぎて、現代史まで辿り着くことができませんでした。とりあえずは、今回の学びを中間報告させていただくこととして、今秋、教会協議会で学ぶ教団の現代史を次回、お届けしたいと考えています。教会の歴史だけは、現代史が取り残されてしまう高校の歴史の授業のようにならないように心がけたいところです。(2012. 9. 17 魚住)



「季报うちまる」編集委員：魚住英昭、神谷一夫
〒020-0021 盛岡市中央通一丁目6-44
TEL(622)6688 FAX(622)2565
日本基督教団 内丸教会 牧師 中原真澄